

## 小堀遠州が手掛けた庭

（国指定名勝 頼久寺庭園）  
江戸時代初期 頼久寺

頼久寺庭園は頼久寺町の頼久寺内にある庭園です。

慶長九年（一六〇四）父小堀正次（一五四〇〜一六〇四）が急逝したため、子の小堀遠州（一五七九〜一六四七）が跡を継ぎ、備中国奉行になりました。当時、備中松山城は荒れており、頼久寺が政務を執る場所になっていました。このた



北側書院から見た鶴島

め、遠州が国奉行在任中（一六〇四〜一六一七）に作庭したものと考えられています。この庭園の特徴は数多く指摘されていますが、もつとも注目されるのは庭園中央の鶴島です。

鶴島は高さ約一五〇センチの板状の石（以下、立石）を中心にした石組みと刈り込みされたサツキとでできています。一見、自然石を無造作に置いているようにも見えますが、見方によって、いろいろなものに見えるように工夫されています。私たちがもつともよく拝観する北側書院からの眺めからは、立石とその両側に置かれた二つの石で名前のとおり「鶴」を表現しているといわれています。そして、鶴島に対して亀島（現在のものは遠州時代よりも新しいものですが）も庭園の南東部分に築き「鶴亀の庭」の体裁を整えています。次に、同じ組み合わせで「三尊の石組み」と呼ばれるように釈迦如来、普賢菩薩、文殊菩薩の組み合わせのように三尊仏に見立てた見方もあります。

視点を少し引いてみると、庭園全体に敷かれた白砂と庭園北東部斜面のサツキの大刈り込みで海原を表現し、鶴島全体を神仙思想で読まれる伝説の「蓬萊島」になぞらえる見方もあります。これは枯山水と呼ばれるもので、水を使わずに水流の表現を行い、庭を構成する方法です。加えて、遠く東南部にそびえる愛宕山を借景として、奥行きを広く見せる演出がされて



北側書院からの庭園全景

おり、その風景の中に「瀧」に見立てることもできると考えられています。これらの見方は武家好みの書院庭園によく見られる特徴といわれています。

また、東側の庫裏の縁側からみると、仏教の世界観で示される、世界の中心にそびえる「須弥山」に見立てることもでき、禅院庭園（禅宗の寺院にみられる庭園）としても意識されています。

このように遠州は彼の生きた時代のさまざまな技術、思想、宗教を取り入れながらこの庭園を作ったことが偲べれます。現在、保存整備も進められており、これからさらにこの庭園のことが明らかになることでしょう。

（文・歴史美術館学芸員 加古一朗）

参考文献：名勝頼久寺庭園整備委員会・頼久寺編『名勝頼久寺庭園整備等指針報告書』平成18年3月

※ 9月号に誤りがありました。お詫びして訂正します。3段10行目：現栃木県筑西市→現茨木県筑西市

編集と発行（毎月15日発行）高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。



古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。